

『ルーシをめぐりて』における

《遍歴者》の形象と課題

(自伝的主人公の問題 Ⅲ)^{*}

松 本 忠 司

ゴーリキイの『ルーシをめぐりて』全編に語り手として登場する、一人称による自伝的主人公は、彼の初期創作におけると同様、80年代後半から90年代初めにかけての作家の若き日の生活を再現しつつ、多くの場合、ルーシ遍歴の途次にある漂泊の青年として、ときには初心の作家として、あるいはよるべない孤児の少年として読者の前に現われる。しかし、初期創作と「ルーシ」系列の諸短編とのあいだには十数年の歳月が横たわり、第一次革命から第一次世界大戦勃発直前にいたるまでのロシア史の激動の歩みがあり、作家による革命運動への積極的参加、国外亡命、建神主義における苦悩にみちた試行錯誤、ふたたびボリシェヴィキー機関誌・紙への協力という経験が連らなっていた。新しい語り手としての自伝的主人公は、初期創作のそれと同一のタイプであるのか、そうではないのか。

前稿において指摘されたように、『ルーシをめぐりて』の連作短編の多くは最初、個別的に各種雑誌に発表されたさい、「遍歴者の回想より」(Из воспоминаний проходящего), 「遍歴者の印象より」(Из впечатлений проходящего)の副題が付されていた。ゴーリキイは、「проходящий」というこの用語をコロレンコの短編から借用したと語っている⁽¹⁾のであるが、コロレン

* 本稿は、本誌第32輯および第41輯所収の拙稿「ゴーリキイの初期創作における語り手の形象について」および『『ルーシをめぐりて』の世界』のあとを承けるものである。

(1) «А.М. Горький и В.Г. Короленко /Переписка, статьи, высказывания/», Гослитиздат, М., 1957, с. 69-70.

コとはちがって、文字どおりの語義——《歩き廻る者》、《漂泊の人》という意味で使用しているのではなかった。1912年9月、ゴーリキイは、オフシャニコ＝クリコーフスキイにあてた書簡の中で、連作短編の構想にふれつつ、語り手の性格を《проходящий》と規定し、同じように徒歩旅行者の意味をもつ《прохожий》との違いをつぎのように強調している。「あなに送付したオーチェルキに、どういう表題をつけたらいいか、わかりません。『ルーシ。遍歴者の手記』（«Русь. Записки проходящего»）という共通表題を与えようかという不遜な企図を私は持っているのですが、これはあまりに大きすぎることになりましょう。私は故意に《проходящий》と言っているのであって、《прохожий》ではないのです。私が思うに、《прохожий》は自分のあとに痕跡を残しません。ところが《проходящий》は——ある程度まで活動的な人物で、実在の印象をただ汲み取るばかりでなく、ある一定のものを意識的に創造するところの人間です。」⁽²⁾（傍点——引用者。以下同じ。）

同様な発想は、この時期に書かれた自伝的中編『主人』（1913）の初版においても見られる。ここでは、浮浪人をさして古くから、そして最も一般的に使われていた《бродяга》が、《прохожий》と同列に並べられ、これらに《проходящий》が対置されている、——「бродяга——これは跡方なしだ。彼のあとにはなんにも残らない」, 「бродяга——これは、言うならば、прохожийだ。これに対し、проходящий は自分のあとに痕跡を残す……彼は籠を抱えるごとく、歩いて行くのだ。籠の中にはさまざまな種子がある——ヨモギもあれば、麻も、花も、ライ麦もある。」⁽³⁾

このように、ゴーリキイは、新しい語り手の性格を、ロシア大地に《永遠的な、理性的な》ものの種を播きつつ、自己の行程のあとに深く鮮明な痕跡を残しつつ、生活の中を歩いて行く《遍歴者》として、明確に、意識的に規定した。たしかに、初期創作の語り手もまたその最初から、生活の単なる観

(2) М. Горький, Собрание сочинений в 30-ти томах, Гослитиздат, М., 1948-1955, т. 29, с. 251.

(3) «Совершеннолетие», Книга 5, СПб., 1913, с. 20.

察者としてではなく、目的意識的な生活探求者として登場したのであった。生活の悪について、国中に氾濫する生活の悲惨について、生活の重圧のもとに人びとがいかに人間らしい風貌を奪われ、その魂がいかに歪められているかについて読書界に報告するとともに、そうした地獄の世界に生きる声なき民衆の代弁者として、民衆の血と汗の犠牲の上に安閑と優雅な知的娯楽にうち興じている教養社会に猛省をうながし、社会的責任の覚醒を強く訴えること——これは若きゴーリキイの客観的な課題ではあった。しかし、彼がその初期創作の中に語り手の形象を導入するさい、この形象の積極的意義は作家にとっても、必ずしも明確に意識されていたとはいえないのである。

「ルーシ」系列の語り手＝《遍歴者》の、初期創作の語り手との違いは、具体的には、何において現われているだろうか。

まず第一に注目されることは、初期の自伝的主人公の形象にとって重要な意味をもっていた《活字崇拜》の要素が、《遍歴者》の性格づけにおいて、ほとんど完全に消えていることであろう。彼のもとになお留められている《書物臭》は、すでに主人公の基本的性格を形成するものではなく、その教養水準を示すものでしかない。かつては対話者を辟易させ、ときには敵意さえよび招いた、初期創作の語り手のあの博識と難解な用語は、新しい語り手においては対話の中に現われることはなく、もっぱら世界認識にかかわる彼の内的独白の範囲に限定されている。そして、最も重要なことは、彼はいまでは、書物の中から完璧無謬の生活上の《教理》を汲み取るのではなく、人間とその可能性についての一般的信念を汲み取っているということである。かつて主人公には、ときには、世界を説明することが《容易な、わかりきった》ことのように思われた（たとえば『コノヴァーロフ』）。いま、《遍歴者》にとって特徴的であるのは彼の周囲の《理解しがたい》、《もつれた》現実、その中に生きる人間の存在意義についての不安な疑惑、悩ましくもしばしば矛盾する生活探求のモチーフである。「……そして私のもとには不安な、鎮まることのない問題がある——《いったい人間の魂とは何だろ

う？」⁽⁴⁾」(『流水』, c. 24)

たとえば、初期短編『エメリヤン・ピリヤーイ』における、自伝的主人公マクシムの、複雑な生活的諸問題に対する断固たる原則的回答を、「ルーシ」系列の『カリーニン』の中のつぎの場面と比較してみよう、——自伝的主人公は同行のカリーニンにたずねる。「あんたはきっと、自分と同じ人間をあまり愛していないのだね？」相手はそれに——「汝の隣人を愛せ、犬が棒を愛するがごとく」と答え、暫時の間をおいて逆に質問する。「なんのためにそいつを愛すんだ？」これにつづく語り手の言葉はこうだ、——「そのとき私も、何のためだか知らなかった。」(c. 195)

《活字崇拜》からすでに解き放たれた《遍歴者》にとって、生活における多くの事象は単純・明快に論断し得る《解決ずみ》の問題ではなく、自分自身の思考と体験とによって解かねばならない謎となっている。彼の中にはたえず疑問が波立つ、——「はたして空と星とはこの生活を覆うためにあるのか？ あのような生活を？」(『グービン』, c. 42)「誰かに訊ねたい、怒りをこめて訊ねたい、《これらのいっさいは何のためか？ 誰が人びとを歪めつつ、人びとを笑うのか？》」(『パナーシキン家の夕べ』, c. 258)そして彼は、「多くのことについて、誰か、大胆に、誠実に、簡明に答えることのできる人に訊ねたい」(『故人』, c. 224)という願望を抱いて、それゆえに、「私はたいへん注意ぶかく人びとを見る」(『流水』, c. 24)のである。このように、借りものの《知恵》によって人びとを啓蒙しようとするかわりに、生活の謎を解く鍵を生活そのもののの中に、生きた人間の中に探り求めようとする《遍歴者》の姿勢は、彼と人びととのあいだに新しい関係、連帯意識の関係を徐々に構成してゆく。連帯の基軸となるのは、創造的労働のバトスである。かつて初期創作の語り手は、ツァーリズム体制下のロシア生活機構を《灰色の日常性》と指摘し、この機構の内に生存する人間の《灰色の人間》への

(4) М. Горький, Собрание сочинений в 30-ти томах, т. 11, с. 24.

以下、《По Руси》の連作短編よりの引用はすべて本書に拠り、引用文の末尾に該当ページを記し、必要ある場合には作品名を付すものとする。

不可避的変質の運命をあばき出すとともに、不幸なパーヴェル、乞食の少年リョーニカたちによる、孤立した《抗議者》によるこの世界への挑戦が無残な敗北に終わり、そして体制からはみ出た《永遠の自由を憧影する》浮浪人社会においても行きつくところは、無為、絶望、虚無による自己の人間否定にほかならないことを示し出した。しかし、「ルーン」系列の《遍歴者》は、遍歴の行程において彼が会う人びとを、《灰色の人間》の範疇においても、《浮浪人》の範疇においても見ようとしてはいない。これらの人びとの多くは、いかに苛酷な生活条件のもとに生存を余儀なくされているにせよ、どれほど野蛮に、その本来の人間的資質が磨滅させられようとしているにせよ、それでもやはり、日々の労働によって人間の生活を支えている創造者＝人間として位置づけられている。『墓地』で偶然出会った老人は、《遍歴者》の胸に深い感銘を刻みつける言葉を残す、——「人間はこの世界に対する働き手だ、生活はすべて、目立たない小さい人びとの偉大な事業なのだ……十字架の上、故人の墳墓の上に彼の生前の事業のいっさいを書き留めなければならない、たとえそれが取るに足らないものであったとしても。だが、取るに足らないものの中にも良きものを見出し得る自己を造らねばならない。」(c.100) やがて《遍歴者》自身が一人の年老いた農夫の死にさいして、請われるままに鎮魂の読経を引き受けたとき、彼の中に人間の労働の不死性についての感慨が湧き起こる、——「私は一人の、小さな、平凡な人間が死んだという事実を知っている。しかし、彼が為した仕事のすべてを思うとき、それは驚嘆すべく大きい仕事に思われるのである。」(『故人』, c.224)

労働する人間のみが大地の真の主人であるべき権利を有するにもかかわらず、現実の環境世界は労働の価値を歪め、労働する人間を畸型化し、家畜に似た何ものかに変えようとしているのだという判断、教条からではない、実践的体験的把握が《遍歴者》の生活哲学の中心的理念——変革の理念を生み出す。もしも初期の自伝的主人公が人びとの中に行動の積極性を、主として啓蒙的言葉を武器にして、喚起しようとしたとすれば、《遍歴者》は《目立たない小さい人びと》の中に、その《取るに足らないものの中に良きも

のを見出す」ことによって、人びととの血のつながり確かめ、生活創造の課題を追求する巨大な人間集団のうちに自己を結合しようと希求する。「すべての人びとを自分と一体と感じ、自分が人びとの心のように感じる瞬間がよくあるものだ。」(『谷間で』, c.162-163) すでに《遍歴者》は、自己と民衆とのあいだに断層も、深淵も、越えがたい一線をも設定していない。彼は民衆の部分であり、彼の志向は民衆の魂の一部でもあるのだ。たしかに80年代ロシヤの現実は暗く、「どこかへ昇ろうともせず、下降しようともせずに、私がその中を通してこの地上を歩んでいる、その人びとの大多数は、塵埃のように灰色で、自分の不必要さによって苦痛なまでに打ちのめされた人びとである。」しかし、《遍歴者》は叫ぶ、——「生活全体を美しい、誇らかなものとして見たい。」そして、それに揺ぎのない論理としてつぎの言葉がつづく。「生活をそういうものにしたいのだ……」(『女』, c.128)

《遍歴者》の生活変革への願望、それはロシヤ民衆の数世紀来の宿願でもあるのだが、『イゼルギリ婆さん』における《燃える心臓》のイメージを彷彿とさせるものでもある。ダンコにけると同様、《遍歴者》の燃える心は、世界に対する、人間に対する彼の巨大な愛の象徴である。「小さな、人間の心は反逆の炎に包まれて、燃えつきようとしながら世界に向かって呼びかける。《われは汝を愛す!》」(『カーニン』, c.190) ダンコにけると同様、彼の心は人びとの幸福のために燃えるのだという信念が吐露される。「闇の中を行く私の体は光を発する。私が生きた灯火で、私の胸の中で心臓が赤い火となって燃えているような気がする。そして、私は心から願うのだ、誰か道に迷った気の小さい者がこの小さい火を見つけてくれるようにと……」(同上, c.207)

ロマチック伝説のダンコの英雄性の要素は、《遍歴者》において、彼の志向の高潔さにおいてのみ現われるのではなく、しばしばそれは人びとの運命に直接的に関与するという実践の行動をとおして発揮される、(『人間の誕生』、『女』、『故人』、『ストラスチ・モルダスチ』など)。たしかに、その力の適用範囲はまだ非常に狭く、彼はまだしばらくは孤独な存在でもある。彼が影響を与

えることのできるのは個々の人びとのみであって、社会層全体、大きな人間集団ではない。彼の志向と行為が、いかに高潔で、人間性あふるるものであるにせよ、しかし、それによってこの地上の巨大な人間の悲哀は消えることも軽減されることもない。そして《遍歴者》の実践は、明白に社会的性格を帯びたものではあるけれども、まだ一般的歴史的 성격の高さとひろがりを獲得するまでには達していない。《人びとのために、人びとと共に》——これは彼の生活原則の両輪であるのだが、この原則の適用の現実において、多くの場合、原則の一面のみ——《人びとのために》という実践にならざるを得ない、彼自身がその実践の偏頗性を苦く感じつつ、その原則の完全な実現を熱烈に期待しつつ。

しかし、ここで注意に価することは、《人びとのために》の自伝的主人公の献身が、初期創作の『私の道づれ』におけるような、無差別的な、福音書的な、あるいは寄生虫によってその善意が蹂躪されることを許容するというそれではないことである。ある人びととはその献身によって彼は精神的つながりを強化するが、他の人びととは、共に歩む道なしと判断し、決然と、永久に袂別する。

たとえば、短編『カリーニン』がそうだ。最初、《遍歴者》は、風変わりな浮浪人カリーニンのもとに「自分の神に対する奴隷的な、臆病な態度」がなく、独特な楽天的生活理解があることで、彼に惹きつけられた。しかし、カリーニンともっと親しく知り合うと、聖職者たちも俗物たちをも痛烈に洒落のめす、その特異な魅力的言動のかげに底知れぬ精神的荒廃が隠されていることをさとり、《遍歴者》は次第に自分の知人に幻滅する。「私はもう彼の言葉を聞きたくない。私を彼に引きつけていた糸は、なんだかいつべんに燃えつき、切れてしまった。」彼の前にいるのが現実との消極的《不同意》の説教師で、「おれはおまえから何も望みやしない。おまえもおれから何も求めるな」という、人民連帯の否定のプロパガンジストであることを決定的に確信したとき、自伝的主人公は彼と同行の道をつづけることをきっぱりと拒絶する。彼は自分の態度を意味ぶかく表明する、——「あんたと同じ道は

おれにはふさわしくない。」(c. 206) 一つの短編小説の枠の中で、ゴーリキイは、たがいに否定し合う二つの世界観を衝突させるばかりでなく、《проходящий》と《прохожий》のそれぞれの特質を浮き彫りにしながら、両者の相互関係を最も合法則的解決へ——決裂へと導いている。《遍歴者》は、以前のように、その同行者への献身に対する報酬として、身ぐるみ剥がれて置き去りにされるという手痛い《教訓》を受け取るときまで、ただ漫然と待ってはいない。なぜなら、彼にとって時は貴重であり、彼がめぐり合わなければならない人間は、広大なルーシの地に数かぎりなく存在するのである。《破滅を運命づけられた人》のそばで時を空費することは彼にとってばかりでなく、ルーシにとっても損失であろう。だからカリーニンと別れたあと、《遍歴者》は孤独を意識するどころか、カリーニンによって幾分か遠ざけられていた世界との、たくさんの人びととのつながりをヨリ密接なものとして取り戻すことができる。「私の心と世界を結ぶ糸は日ごとに、ますます多く、数えきれないものとなり、私の心は何かあるものを蓄積してゆく、そしてそこから生活に対する愛の感情が心のうちに成長してゆく。」(c. 206) この《糸》と《愛の感情》とが、この短編のしめくくりの文——さきに引用した(188ページ)「闇の中を行く私の体は光を発する……」というダンコ的心象を導き出すのである。

《遍歴者》が出会うもう一つのグループに属する人びとは、カリーニンのタイプときわめて対立的である。ゴーリキイは、独特な芸術的技巧を駆使することによって、自伝的主人公と精神的に親近な人びととのつながりを強調している。『ルーシをめぐりて』の諸短編において登場人物たちは、ゴーリキイの多くの作品におけると同様、その生活哲学を簡潔な、すっきりと磨き上げられたアフォリズムにおいて表白するのであるが、それぞれの短編の結末で、語り手は彼の気に入った人物から聞いた《翼ある言葉》を繰り返し、それを語った人間についての記憶として、その人間との精神的連帯を確固たるものとする思想的握手としてわが身に担い、その後の行程を歩みつづけてゆく。——「ざっくばらんに生きようぜ、世間は世間、おれらはおれらさ！」

短編『故人』の登場人物はつぎつぎにこの言葉を繰り返す。貧困にも抑圧にも屈しない民衆の楽天性、たえず社会的規制を乗り越えて人民生活の真実の欲求に根ざして燃えたつ、その創造的エネルギーの不滅性をあらわすこの言葉は、「つばめのように地上全体の上を飛ぶ」(c. 217) そして、人びとと別れて、《遍歴者》はこの言葉を自分の心に銘記しつつ新しい、困難な旅程へと踏み出し、麦畠の上に輝く《生命の支配者》太陽との合体という宇宙的心象に包まれながら、太陽の讃歌をうたい、叫びだすのである。

「わが体は全身輝き、
あらゆる始源と権力の上に
われは高く昇れり！」

……ざっくばらんに生きようぜ、世間は世間、おれらはおれらさ！……」
(c. 226)

短編『女』では、タチャーナとのつかの間の出会いののち数年を経て、自伝的主人公は、人びとへの悩ましい愛につらぬかれた彼女の言葉を思い起こし、感動をこめて繰り返す、——「大きな悲しみの中では小さい喜びも大きいものだ。」(c. 151) 短編『流水』では、危険な渡河作戦を終えたあと、平常の《仮面》の世界に戻った大工のオーシプが、溜息まじりに、——「人間の魂にゃ翼があるだよ、夢の中で飛ぶだよ……」というとき、彼の内奥に秘められた偉大な資質の発見を価値ある賜物として受け止めつつ、語り手はこの言葉をを引き継ぎ、物語を完結しながら叫ぶ、——「翼だって？ すばらしい！……」(c. 40)

『ルーンをめぐる』においては、社会的《理性》の担い手と《自然成長的》現実との関係が対立関係において把えられているのではなく、相互作用的关系において、相互の補強的影響において密接な融合へと発展するプロセスとして把握されている。

自伝的主人公の世界観、その精神的光芒の本質的特性として特に検討を要するのは、その独自のロマンチズムの問題である。

《遍歴者》の生活に対する態度を特徴づけているのは、二つの基本的モチーフである。《心臓の血を食欲に吸い尽くす》憂愁 (тоска) と《地上のすべてに対する食欲な愛》のモチーフである。このことについて、連作の開巻をなす短編『人間の誕生』において語り手自身が明白に述べている。

「至高の使命——それは地上において人間であることだ。どれほど素晴らしいものを見ることか、美しきものの前で心臓が、静かな讃嘆のうちに、いかに悩ましくも快く波打つことか！」

だが、しかし——ときには辛いこともある、胸いっぱい燃えたぎる憎悪にひたされ、憂愁が心臓の血を吸い尽くそうとする。しかし、それはいつでもそうとは限らない……」(c.8)

《遍歴者》の《憂愁》は、「無益に、無意味に滅んでゆくロシア人たち」(『女』, c.152), ルーシの民衆の苦悩が氾濫する重苦しい光景によって生み出されたものだ。まだ明確な社会的理想の獲得には到達しないまま、彼はしばしば人間への疑惑、その破産の感覚、自己の孤立の意識という劇的な瞬間をも体験する。しかし、彼は自分の《憂愁》そのものに耽溺せず、その本質をしかと見据える。「これは、もうろうとした、病的な希望の赤錆びによって魂を浸食し殺してしまうあの憂愁ではない。これは古くからの私の女友達で、生活の力に対する私の信念が生んだ実の娘だ。」「私の憂愁は、きっと、人間の魂と呼ばれているそのものに違いない、それは私の胸の中に生きている本質である。それは常に倦むことのない力をもって、私をどこか前方へ、より前へと押し進める……」(『チャングール河畔にて』, c.385~386)

《生活の力》への確固たる信念——これがゴーリキイの主人公の基本的特徴であり、そのロマンチズムの独自性に関し、先行する時代の文学の主人公たちとの相関の分析において主軸となるはずのものである。

《青春のロマンチズム》——不合理な人間抑圧の諸原則が君臨する低俗な現実の束縛から解き放たれて、限りなく高く飛躍しようとする夢想、現実と理想との激烈な葛藤は、世界文学史において重要な主題となってきた。19世紀の若い人間の精神史を多様に再現する批判的リアリズムの流れにおける

ロシア文学においても、この主題は特徴的にきわ立っている。『ルーンをめぐる』における《遍歴者》のロマンチズムの主題もまた、いちぢるしい程度において伝統的でもある。ここでも青春のロマンチズムは、現実のきびしいリアリズムによって虐殺されるかに見える。

すべてのロマンチストと同じように、ゴーリキイの自伝的主人公は——「貧しく、粗野に生きている、ある別の、明るい、軽快な生活について、勇者的愛について、自己犠牲の崇高な偉業についてのおぼろげな夢想のうちに。」（『シャーモフ邸の夕べ』, c. 241）すべてのロマンチストのように、彼は生活について充分には知っていない。「私の若さは——私という存在の最も愛すべき、そして最も危険な半面である。というのは、それはあまりに貪欲で、充分に振り分けることができなく、ちょうど仔山羊のように、棘のあるいらくさと味のよい、芳しい草とを区別することができないのだ。」（『チャングール河畔にて』, c. 386）すべてのロマンチストのように、彼はしばしば、その不安な空想力によって生活を潤色しようところみ、そして、しばしば、そのことに幻滅を感じる。「不本意ながら、私は自分の希望と欲求の色彩で人生をいろどりつつ、ある複雑な人生史を創作する。私は、これが嘘であると知っている。そして——そのために今に私にとって困ったことになるということも知っている。しかし、現実をかくも畸型的なものとして見るのは胸がふさがる。」（『女』, c. 128）

このような近似性にもかかわらず、ゴーリキイの自伝的主人公と彼以前のロマンチスト群像とのあいだには根本的な差違が内在する。ここでは、19世紀ロシア文学における若い人間、貴族ロマンチストの歴史を取り上げてみよう。主人公たちの運命の多様さにもかかわらず、理想と現実の問題は、そこでは全体として類似の帰着をたどらざるを得なかった。貴族社会の教育システムの全体によって広汎な生活現実から切り離されていた貴族青年たちは、生活の中へ非武装のまま、主として外国書の中から汲み取った、生活についてのロマンチックな、《理想主義的な》観念のみを抱いて、進み入る。生活はこの観念を非情に打ち砕き、その現実適応能力の欠如を暴露させる。そし

て貴族ロマンチストのもとでは、現実との接触による観念の解体はつぎの段階におけるヨリ充実した飛躍を、現実によって鍛え抜かれた新しい、ヨリ強靱な理想の構築を準備することには必ずしもならなかった。ユートピア的・書物的理想と別れたあと、彼らはこれと引き換えには何も獲得しないのであり、反対に、理想一般を拒否しつつ、精神的破綻へのめりこむ……もちろん、われわれの前には、チャーツキイ（『知恵の悲しみ』）、『過去と思索』（ゲルツェン）の主人公のような、少数ながら、たえまなく成長をつづけてゆく人びとの道があり、また、自分の生活観念の崩壊を体験したにもかかわらず、既存の体制との妥協を排して批判的に思考しつづけてゆく《余計者》の最も優れた代表者たちの肖像が立ち並ぶ（ペーリトフ、ルージンなど）。しかし、それ以上に、《貴族ロマンチズム》は《マニーロフ主義》、あるいは《オブローモフ主義》において大量に再生し、完全な《現実との和解》へ、あらゆる《理想》の拒絶へと向かったのである。そのような有り得べき悲惨な結末は、すでにプーシキンによって『エヴゲーニイ・オネーギン』において、身にけがれを知らぬ若き詩人レーンスキイの未来の予測の形で指摘された（第六章 XXXVIII, XXXIX 節）。ほかならぬそのような道が《貴族ロマンチズム》の合法則的・典型的過程であることを論証しつつ、ペーリンスキイは、レーンスキイの最も良いところは彼が「若くして、適時に死んだ」ことであり、このタイプのロマンチストたちの未来像を「最も嫌らしい、最も空虚な、最も俗悪な人間⁽⁵⁾」と規定したのであった。

19世紀文学における理想と現実の主題は、かくしてそのすべての多様な形象をつらぬいて、結局は《平凡な歴史》（ゴンチャロフ）に、《幻想の喪失》の主題に変わってゆく。しかし、ゴーリキイの自伝的主人公においてこの主題は別の展開をくりひろげる。ここには別の歴史的現実があり、主人公が担う理想についての——その形成段階の端緒においてすでに——別の観念がある。外面的には、ここでも夢は現実には勝利することはできない。しか

(5) В. Г. Белинский, Избранные сочинения, Гослитиздат, М.-Л., 1949, с. 648.

し、苛酷な現実との接触によって崩れるのは「青春のロマンチズムの清楚な覆い」（『主人公』, c. 315）、つまり生活の知識の不十分さから生ずる未熟な、《書物的》観念のみである。短編『主人公』において自伝的主人公は語っている、——「幼年時代と少年時代に私は、おそらく、屈辱の苦さをあまりに多く経験し、苛酷さ、悪意ある愚かしさ、無意味な嘘をあまりに多く見た。心にのしかかる早すぎた重荷は私を圧迫した。私には生活の中に、人びとの中に、心にのしかかる重苦しさと釣り合うことのできる何ものかを発見することが必要であった……」（c. 310-311）彼のロマンチズムは、現実の完全な無知から発するのではなく、現実の暗黒面の圧倒的優勢の知覚に始まり、これに《釣り合う》何ものかを求めずにいられぬ衝動によって触発されたものである。彼が書物の世界に惹きつけられたのは、それ以外に生活を知る方法がないからでなく、彼が知りすぎていた周囲の生活においては見ることのできないもの、あるべきはずの生活の規範、生活の《真実》を知りたいという欲求からであった。この衝動、この欲求は彼の人間の本質であるゆえに、必ずしも《真実》とは限らないところの、書物から汲み取った観念が一再ならず打ち砕かれようとも、それは観念の敗北にすぎず、彼の内部ではいよいよ激しく燃えたつ欲求が、現実のヨリ深い、ヨリ広い認識によって鍛えられつつ、新たな理想を生み出して行く。彼の理想は現実との衝突によって挫折を経験する度に、死の廃墟の中から蘇って、不死鳥のようにいっそうたくましく、いっそう広く高い飛翔へと飛び立つのである。だが、人間の尊厳を、解放を、人間相互の人間的な、公正なあり方を念願する彼の理想はいまだ未定形であり、理想というよりは夢に近いであろうか。いや、理想も夢もともに当たらない。これを表現するためにはロシア語によらねばならない。それは《мечта》である。《メチター》——それはおぼろな夢や空想ではない。人の創造力の根底にあってその泉となるもの、魂を不断の飛躍へと招きよせ、精神的高揚へといざない励ますもの、真善美への憧影を心のうちによび覚まし、靈感となって限りある人の力に創造の勇気を与えるもの。夢といっっては淡きにすぎ、理想といっっては固定しすぎるひびきとなろう。この

人間の魂を訪れる最も精神的なあるもの——それが《メチター》であり、ゴーリキイの自伝的主人公の内面の中核を形づくるものであり、数多くの幻想を払い除けながら、やがては地上の生活を真実に変革する力を人びとの中に育て上げてゆくものである。

この意味で、『十コペイカ銀貨』、『幸福』、『主人公』などの諸短編は、『ルーシをめぐる』の中で独自のグループをなし、もっぱら《青春のロマンチズム》の主題を土台に組み立てられ、しかも主題の解明が外面的には伝統的な処理（《幻想の喪失》）においてなされているということでも、特別の興味をよび起こす。『十コペイカ銀貨』における十三歳の少年の幻想と夢は、あまりに幼稚で、素朴で、はかなく消え去る運命にあるが、それは主人公の青春期にふたたび蘇えり（『幸福』）、ふたたび現実によって《論破》され、そしてさらに語り手の創造活動の開始期に、『主人公』の形で現われる。ここでも幻想は打ちこわされるが、すでに語り手のもとには、《幻想の喪失》によっては滅びることのない、人間への信頼が牢固として確立されている。

人生の中に「清純な、美しいものを見たい」——これがゴーリキイの自伝的主人公の根源的《メチター》である。「人生が、古い、取り散らかした焼跡のように、醜く汚らしいものであるならば、自分の魂と自分の意志の働きによって、自分の想像の力によって、それを清め飾らなくてはならない、——結局、まさにそのために私はやって来たのだ。」（『主人公』, c. 311）この《メチター》が多くの夢を、幻想を、空想を育む。そして、主人公の《メチター》が生活自体の内包する《メチター》とびったり融合するときまで、《幻想の喪失》が連結する。しかし、問題は《メチター》そのものにあるのではなく、その《適用》にあるのだ。《遍歴者》における理想と現実の相剋の主題は、過去の文学に多く見られるような、ロマンチックな《メチター》があらゆる現実と原則的・決定的に両立しがたいということにではなく、崇高な《メチター》と、崇高なるものを何ものも受容しまいとする一定の、与えられた現実との不相応にある。《遍歴者》は、彼の《メチター》が生命の燃焼そのものであり、人間が生きるために必要な活力であることを知ってお

り、それゆえに、度重なる《幻想の喪失》にもかかわらず、その《メチター》の根をおろすべき現実を創造的に探求しつづけるのである。

この《メチター》を鼓舞し強靱に鍛え上げるのは、《遍歴者》と労働する人民とのつながりの強化である。『人間の誕生』、『谷間で』その他の諸短編には、語り手の靈感を鼓舞し、高揚へと勇気づける彼の祖国の自然についての感動的描写が繰りひろげられる、——涯知れず、豊かな富を秘めた大地、そこにはねばり強く、その生活愛において倦むことを知らない人びとが生きて、働いている。ほかならない労働する人びとの生活観察の中から、その悲惨な生活現実の被覆を突き抜けて、やがて溢れ出るであろう、明るい生活創造の尽きせぬエネルギーの 実在への確信が《遍歴者》の内部に生まれたのである。人間（Человек）——この格調高い、誇らかなひびきを発するこの呼称、過去の時代（век）の人類が克ち取ったすべての経験のうち最も良きものを遺産として、自分の額（чело）のうちに刻みこみつつ、自分の時代にさらに一步の前進を印しながら、未来を伐り開いてたえず歩みつづけるもの。この崇高な呼称にふさわしい品性を人間は内包しているし、その品性の発揮にふさわしい生活をこそ創造しなければならない——《遍歴者》の《メチター》は現実との接触によって、ますます緊密に具体的歴史的課題に結びついてゆく。

短編『女』の中で《遍歴者》は語る、——

「……魂が呻き出す。そして、すべての人びとのための屈辱に満たされ、地上のすべてに寄せる燃えたぎる愛に満たされた言葉を誰かに言ってみたくなる、——太陽がその光線でこの大地を抱擁し、青い空間の中でその愛する大地を受胎せしめ、愛撫しながら運んで行くとき、太陽の美しさについて語りたくなる。太陽を仰ぎ見るよう、人びとに何か言葉をかけてみたい。すると、ひとりでに、若々しい歌が出来上がる——

わが生みの大地によって
われらは倅せのために生み出された！
大地の美を増すために

太陽はわれらを地上に与えた！

太陽の輝く殿堂で

われらは神々にして、また、神官。

われらが生活を創ったのだ、われらが！……」(c.136~137)

主人公による自然の認知は深く楽天的である。自然——それは絶妙に美しい、永遠に創造的な生活の、「大地の不朽の力の秘められた調和」(c.189)の権化である。そして人間は、あたかも均整のとれた調和的世界の一部であり、彼はその限界を知らない精神の働きによって全宇宙を把握することさえ可能なのだ。そのとき、大地全体さえが彼には「人間の心臓のように小さいもの」(c.206)に見えてくる。こうして、彼の《メチター》は、そのうちに地上の現実をも含んで宇宙的規模において人間の意義、使命、その可能性についての信頼を確定するのである。

《青春のロマンチズム》の主題は、この時期のゴーリキイの他の作品——たとえば短編『マカールの生涯の一事件』(1932)の中でも採り上げられ、ここではいっそう凝縮された形で、集中的に追求されている。自伝的主人公マカールは、美しいもの、崇高なものを生活の中に求め得ず、書物の中にのみ見ていたゆえに、生活に絶望し、自殺を決意した。自殺に失敗し、病院に横たわる失意の彼のもとに労働の仲間たちが訪れる。そのとき初めて、自分とともに働いている人びとの内奥に秘められた高貴な人間的品性の実在を彼は知って、これまでの誤解を改め、生活自体が、生きた人間が真の価値の源泉であることを確信するにいたる。《書物的》信仰は《生活の力》への信頼に、《リアルな》ロマンチズムに——生活が生み出す変革と創造のパトス、いわゆる《ロマンチカ》に席を譲った。

かくして《遍歴者》の形象におけるロマンチズムの主題は、ゴーリキイの初期創作におけるロマンチズムの高度な発達、現実との遭遇、磨擦、融合の濾過を潜り抜けて獲得された生活の《ロマンチカ》として理解される。周知のように、ゴーリキイの初期創作には二つの作品系統がきわ立って現われている、——ロマンチック系列とリアリスチック系列である。両者の

あいだには本質的連繋があり、相互影響関係があるにせよ。作家の社会的理念の未定形あるいは不明瞭さのために、理想的なものの追求はもっぱら制約された、一般的形式（ロマンチック伝説、説話）において表現され、反対に、本来的にリアリチックな作品においては主として作家の現実に対する批判的パトスが集中された。この差違は、もちろん、絶対的ではない。リアリスチックな性格の作品の中でも、作家は、生活の肯定的価値の発掘を探求したのである。しかし、若きゴーリキイの類い稀な才能をもってしても、環境現実における肯定的始原は、作家がロマンチック系列において描いたようには、無条件に肯定的・目的意識的個性の形象化が与えられなかった。浮浪人小説その他における《並みはずれたもの》の明るい個性は、その内部に否定的始原を併せ持ち、構成的矛盾を免れ得なかった。同じことは、初期創作の自伝的主人公の形象における肯定的始原についても言い得るであろう。ここでは人間をおもう悩める魂の叫びがかくも強く感動的に迫ってくるものがあるのだが、後期の主人公におけるようには、あの確信の強固なパトスをひびき渡らせるところには至らなかった。

ゴーリキイの創作における社会主義リアリズムの諸原則の形成とともに、理想の詩精神は、彼の作品において、作家の同時代の現実自体の特徴となり、《ロマンチックなもの》はリアリスチックなものの前兆となり、未来の先取りとなってゆく。『人間』、『母』、『敵』などによる新しい芸術的視点の獲得は、「オクロフもの」や『懺悔』における民衆生活の底辺への深い洞察と相まって、過去の生活のヨリ深い、ヨリ正しい描出を条件づけた。『ルーンをめぐりて』の世界、とくに自伝的主人公の形象の中に、生活の内包する肯定的始原、生活創造の《メチター》が確信的に語られる。初期の自伝的主人公の中にではなく、ほかならぬ《遍歴者》の中に、作家の最も肯定的なロマンチック形象——ダンコの性格的特質が再現されるのは偶然ではない。《ロマンチックなもの》は、すでに具体的歴史的タイプの世界観における独自の、基本的特徴となっているのである。しかも、ここでとくに注目されることは、それがダンコの性格の再現にとどまらず、緊急の現実的課題の

射程において把握されていることだ。個人と集団の問題についてまだ最終的解決には到達せず、苦しい模索のさなかにあった若きゴーリキイのもとでは、ダンコの輝かしい形象においてすら、その偉業ののち、その誇らかな心臓が《一人の用心ぶかい男》によって、何ごとかを恐れて、踏みつけられ、消え去る運命をいかんともしがたかったのであるが、1910年代、すでに四十代のなかばにさしかかる作家の成熟した目は、1917年へと激動を始めたロシアの現実の諸矛盾に深く透徹し、《遍歴者》におけるダンコの性格特徴を、特殊な、例外的ないし偶然的なものとしてではなく、民衆の生活創造的エネルギーの本質に根ざす典型的要素として、また、それが特定個性の天与の資質ではなく生活現実との接触の拡大・深化によって培養されたものとしてとらえ、人民諸階層の中に無数に実在するところの、ダンコの要素の片鱗を内奥に秘めた労働する人びととの結合によって、《人びとのために、人びとと共に》、その主人公が歴史的課題の実現へと向かう、現実の可能性を展望するのである。

かつて私は、ゴーリキイの初期創作の語り手について、これが作家の自伝的要素を濃厚に帯びた独自の形象であるとともに、民衆の中から生い育つ新しい知性に共通する典型的行程を示す芸術的形象であり、ゴーリキイはこの形象を通じて、人民生活の探求の総括として《大文字で書かれる人間》の理念を引き出すことに成功した、と指摘した。しかし、《人間》の理念はその高さにのみ意義があるのではない。それはまさしく、「地上において人間であること」であり、現実生活の中に生き、たえまなく創造的に生活を変革しつつ、無限の可能性を展望するところに意義があるのだ。したがって、《人間》の理念の確立後、ゴーリキイにとっては、ほかならぬこの理念の生活における具体化が中心的創造課題であった。作家は、第一次革命の激動期において、この課題をまず人民の先進的部分の中で追求し、『母』、『敵』その他における《たたかう集団》の形象を描き出したのであったが、1910年代、新しい社会的高揚の中で、顕著な形をとってはまだ現われない、膨大な

人民諸階層の内部に 始まりつつある 胎動の中に、「各人が人間であることを求める」というあの《人間》の呼びかけに呼応する力を見てとった。ゴーリキイはふたたび、《人間》の理念の形成過程を体現する自伝的主人公を——初期創作におけるよりもっと発達し、はるかに目的意識的に規定された《遍歴者》の形で——登場させ、広汎で複雑な生活画面の中での理念と現実の接点を探求したのである。だが、ここでは理念と現実はすでに対立概念ではなく、相互補完的關係に置かれ、両者の融合の中から生活の《メチター》を醸成するものとなっている。《各人》が《大文字で書かれる人間》となるその《メチター》の実現されるのは、依然、長く峻しい道である。それは社会制度の変革によってただちに解決される問題でなく、外的生活条件の変革と相俟って押し進められる人間の内的生活条件の変革の長い過程を伴う。ゴーリキイは、『ルーシをめぐる』の連作短編の全体を通じて、《遍歴者》と生活という《偉大な事業》をおこなう《小さな、平凡な人びと》との接触の中から、この《メチター》の実現の可能性を具体的に立証することに成功した。そしてそれは1910年代における激動するロシアにとって、最も緊急の今日的課題であったのである。